

## 審査の結果の要旨

氏名 西野達也

論文題目 利用者のかかわり方から見た高齢者通所施設の建築計画  
に関する研究

この論文は、わが国の少子高齢化による人口構造の変化の中で、高齢者通所施設の利用者の場へのかかわり方の観点から、利用実態と問題点及び空間の使われ方を把握し、その建築計画の将来的あり方を提示することを目的としている。

本論文は、8章より構成される。

第1章では、研究の背景、目的、方法、位置づけを整理している。すなわち、高齢者サービスの制度や高齢者像の変化から高齢者福祉政策の視点が施設処遇から在宅生活へと転換している背景、そして一般高齢者通所施設（デイサービスセンター）と小規模のもの（ミニデイ）の存在意義を論じている。

第2章では、ミニデイの利用実態、空間と利用者の行動との関係特性を論じている。利用者属性に基づき「予防型」と「痴呆特化型」の施設型に分類し、さらにプログラムの有無により前者を「サロンタイプ」と「アクティビティプログラムタイプ」に細分類している。また、ある時間での一つの空間にいる人間の活動や集団形成等の全体状況を表す考察単位として「場」を導入し、特に「サロンタイプ」の典型的な場の状況として別々の活動をしつつ同じ場所を共有する「パラレルな場」を挙げるといったように、空間と利用者の行動との関係特性を明らかにしている。

第3章では、一般型デイとミニデイを併用する高齢者6名の両施設での行動観察と考察を行っている。既往研究の会話によるコミュニケーションに加えて、視覚的なものや着座位置等の空間行動を含めてかかわり方と定義している。各構築環境で、いかにその人にとって負荷がなく、その人らしいかかわり方が可能な場の状況を生み出していくか将来的あり方として重要であるとしている。

第4章では、既存家屋を転用したミニデイ施設について、環境行動の観点からの意義を論じている。考察の結果、「家のちから」のメカニズムは様々な生活行為と環境要素が対応する「行動場面」理論を用いて説明できることを指摘している。

第5章では、デンマーク・オーフス市のローカルセンターを対象とし、空間と活動の関係を日本の一般型デイと比較する形で記述した上で、両者の差異の要因を考察している。その結果、オーフス市の通所施設では各室がそれぞれ特定の活動と対応しており、日本の一般型デイでは時間によって一室内で様々な活動が見られたことから、前者を‘コード’、後者を‘モード’と表現している。また利用者の行動パターンは、オーフス市では個々人で異なる様態が見られたのに対して、日本では大凡、一様性が見られたことを指摘している。

第6章では、引き続きデンマークを対象とし、社会的コンタクト（出会い）の観点から、観察事例の分類による考察をとおして、空間構成等について論じている。まず前述の‘コード’により各空間に特定の社会的コンタクトを想定したが、実際には空間の社会的コンタクトの可能性に幅が見られる事例もあったため、その要因を考察している。

第7章では、以上の考察に補足を加えて、通所施設の利用者像は身体的支障がある高齢者、痴呆性高齢者、独居あるいは日中独居の高齢者に分類できることを示した。またこれまでの事例考察をまとめ、一般型デイ、ミニデイ、デンマークの通所施設の場をそれぞれ類型化している。

第8章では、これまでの問題点、今後のケア思想に応じた通所施設のあり方を提案している。それは従来のケア中心の施設ではなく、利用者による自律的に形成される場を提供するものであると結論づけている。

以上のように、本論文は高齢者通所施設の実態観察と分析考察を通して基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与したものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。